

「分かった」から「使える」日本語を目指して  
—中級文法クラスにおける仮定表現の誤用分析を通して—

許 明子 阿部 美菜子

要 旨

本稿は、筆者らが担当した中級レベルの文法クラスで取り上げる仮定表現の学習を通して、学習者の「分かった」を「使える」につなげるための文法教育の在り方を検討することを目的とする。授業で使用した教材やレベルチェックテスト、小テスト、期末テスト等の学習者の解答例をもとに誤用のパターンや背景について分析を行った。その結果、前件と後件の因果関係の不理解、事実と反事実の意味の混同、話し手の意図の見落とし等が誤用につながっていることが明らかになった。文法の知識だけではなく、発話の場面や文脈、発話の意図を理解することが「使える」文法の学習に重要であることが確認された。

【キーワード】 仮定表現 因果関係 発話意図 文脈 使える文法

Aiming for “Useable” Japanese from “Understood” : An Error  
Analysis of Hypothesis Expressions in Intermediate Level  
Grammar Classes

HEO Myeongja, ABE Minako

**[Abstract]** The aim of this paper is to propose a Japanese grammar teaching method to connect learners’ “understanding” to “usable” through hypothetical expressions. We analyzed error patterns and backgrounds in learner answers based on teaching materials used in classes, level check tests, quizzes and final exams. As a result, we found that errors were made by misunderstandings of causality, confusion of facts and counterfactuals, overlooking the intention of the speaker, and so on. It can be said that understanding not only grammar knowledge but also utterance scene, context, utterance intention, etc. is important for learning "usable" grammar.

**[Keywords]** hypothesis expression, causal relationship, speech intention, context, useable grammar

## 1. 問題提起

中級レベルの学習者の特徴は、初級レベルで一度取り上げられた文法項目については「一度学習している内容だから分かる」と考えることが多く、未習の新しい文法項目の学習を望む傾向がある(鶴町・許 2008)。その理由は、初級レベルでは新しい文法項目を「学んだ」という実感が持てる一方、中級レベルに上がると初級レベルと同じ文法項目の「繰り返し」と感じるためである。しかし、「文法は勉強したものの、正しく使えない」と感じている学習者も多く、そのような学習者からは「文法は難しい・苦手」という声も多く聞かれる。

そこで、本研究では、中級レベルの学習者が文法項目を学んで「分かった」という実感が得られ、「使える」という自信につなげるための文法教育のあり方を探ることを目的として中級レベルの文法クラスの分析を行う。その分析を通して、中級レベルの学習者が文法項目を学ぶ際に、どのような問題を感じているのかを解明し、「使える」文法の学習や指導を促進させるための改善をめざす。

許・林(2017)では、中上級レベルの学習者を対象に、知識を学ぶための文法の学習ではなく、コミュニケーション能力の向上を意識した文法学習を促した授業の実践について報告を行っている。それによると、文法の授業を行う際に、学習者に対して以下の3点を意識させることによって、学習した文法項目の算出能力が向上していたと述べられている。一つ目は文法項目が使われる場面や文脈を常に考えること、二つ目は各場面で話し手と聞き手がどのような関係なのかを理解すること、三つ目は話し手が文法項目の使用によって何を伝えたいのかという発話の意図を認識することである。以上の3つのポイントを意識することによって、日本語の授業で学んだ文法項目を日常で使う時も場面や文脈、対人関係を意識するようになり、学習意欲が高まったと報告されている。

本研究では、筆者らが担当した中級中盤レベルで取り上げる文法項目の一つである仮定表現を例として分析を行う。仮定表現は、文法形式の多様さ、類似表現の多さから、中級レベルのみならず上級レベルの学習者も難しいと感じる項目の一つである。仮定表現を学び、使う際にどのような困難を感じていて、どのような間違いを犯しているのか、それを改善するためにはどのような支援が必要なのかについて検討を行う。

## 2. 文法項目の学習上の困難点

筆者らは中級文法クラスを担当するにあたって、学習者が文法の学習にどのような問題点を感じているのかについて自由記述式のアンケート調査を行った。その結果、学習者からは以下のような意見が寄せられた。

- ▶ 文法項目を見たら意味は分かるが、似ている文法項目との使い分けが分からない。

- ▶ 普段の会話で、知っている文法でも使おうとすると間違えてしまう、勉強して分かった文法でも書く時や話すときに応用できない。
- ▶ 国でも日本語が専門で文法を勉強したが、日本では実際に使う文法は微妙に違うと思う。
- ▶ テレビやドラマをみれば内容や意味は大体分かるが、実際に使おうとすると間違えてしまう。各場面に適切で正しい表現を使いたいので、文法を勉強したい。

多くの学習者が文法を学ぶ際に感じる問題点として、「学んだ文法項目の意味、内容は理解しているが、類似表現との使い分けが分からない」、または「実際の日常場面では適切に使えない」という2点を挙げていた。初級レベルから色々な文型や文法項目を学んできているが、文法項目の知識や意味の理解に重点を置かれる傾向があり、文法項目が使われる場面や、話し手の発話意図、対人関係を意識した使い方の理解には注意が払われていないことが上記の文法学習の問題点につながっているのではないと思われる。<sup>1</sup>

本研究で取り上げる仮定表現の場合、筆者らが担当した文法クラスでも「類似表現が多く使い分けを難しく感じる」と述べる学習者が多かった。許ほか(2012)では中級レベルの文法授業で取り上げた項目<sup>2</sup>の中で、学習者が「難しい」「簡単」「面白い」と感じている項目についてアンケート調査を実施している。その結果、中級中期レベルの学習者は最も難しい文法項目として「複合動詞」と「仮定表現」を挙げていた。この両項目はともに「簡単だった」とする回答率が低い結果となっており、授業で学んでいても難しいと感じていることが分かる。しかし、その一方で、「面白い」と感じる文法項目として「自・他動詞」「複合動詞」「仮定表現」が挙げられており、これらの文法項目は「難しいが、面白い」と感じていることが分かった。つまり、中級レベルの学習者は、難しいと感じる文法項目であっても、学習意欲を落としたり諦めたりするのではなく、かえって向上心を刺激され、学習に挑み、理解し学んでいくことに面白さを感じていることが分かる。本研究で取り上げる仮定表現についても、前述したように、多くの学習者が難しいと感じる文法項目として挙げており、4つの条件表現の使い分けの難しさを感じていることが分かった。

次章で筆者らが担当した仮定表現の指導内容について概観し、4章では授業後に実施した学習者の仮定表現のテストの解答例の分析を行う。これらの解答例の分析を通して仮定表現の学習上の問題点と改善策を検討する。

### 3. 仮定表現の特徴

前述したように仮定表現は日本語のどのレベルにおいても学習が難しいとされている。益岡(1993:1)は「日本語の条件表現<sup>3</sup>が他の言語にはあまり見られない多様な類義

表現を有している事実、しかも形式の間に微妙な使い分けが見られることから、外国人の目から理解しがたいものであり、日本語学習者にとって習得が困難であるのも無理からぬことである」と仮定表現の特徴を述べている。仮定表現の多様な意味や類似表現との使い分けの難しさから、日本語教育に関する分野においても学習者の観点から様々な研究が行われてきており（蓮沼ほか 2001、有田 2007 など）、仮定の意味を表す4つの基本的な意味や特徴、並びに使い分け等について解明が続けられてきている。

益岡・田窪（1992：188）では仮定表現等の複文を「副詞節」として分けており、主節の述語を修飾したり、文全体を修飾したりする働きがあると述べている。仮定表現が接続している前件の事柄と主節の述語が含まれている後件の事柄が依存関係にあり、どのような依存関係にあるかによって仮定表現が選ばれるのである。したがって、仮定表現を学ぶ際には主節の述語が表そうとする意味を理解し、それが成立するための「条件」や「仮定」または「事実」をどの形式で表現するかを学ぶことが重要である。

益岡（1993）による仮定表現の意味は、①「偶発的に発生する因果関係」、②「時空間に実現する個別的な事態」、③「ある事態を仮定して提示する」、④「現実には観察される継起的な事態の表現」の4つにまとめることができる。仮定の意味を表す4つの形態がそれぞれの特徴を持っている一方、類似した意味を表す場合もある。また、仮定の形態を持つ前件と出来事を述べる後件はモダリティ性の有無によって成立に関する制限もあるため、複雑な様相を呈しており、学習者にとっても難易度の高い文法項目の一つである。

筆者らが担当した文法クラスで主教材として使用した『レベルアップ日本語文法』では、前述した先行研究の成果を取り入れつつ、仮定表現の基本的な意味について以下のように説明し、練習を行った。

- 「ば形」：ある事態が起こると必ず別の事態が起こる。
- 「たら形」：事態の実現に重きを置いた表現。動態動詞は事態の完了性が含まれる。
- 「と形」：事実として認識している事態の因果関係を表す。
- 「なら形」：前提となる話題に基づいて、帰結の関係を述べる。

同教科書は文法シラバスに基づいて開発されたものであるが、文法知識の獲得だけではなく日本の日常生活で実際に使える文法項目の学習を目指している。仮定表現は第17課で取り上げられているが、仮定表現が使われる様々な日常場面が設定されており、その中でどのような意味を表すのか、前件と後件はどのような関係なのか等に注目しながら学習を進めている。次章で学習者のテスト類での解答の分析を通して、学習上の問題点について考察を行う。

#### 4. テスト結果の分析・考察

本章では学習者が文法項目を使って書いた作文の分析及び各種テストの解答の分析を通して、仮定表現の問題点について詳細な考察を行う。分析の対象としているテスト類は筆者らが担当した授業で実施した「レベルチェックテスト」「小テスト」「期末テスト」の3種類である。初回の授業で行う「レベルチェックテスト」は文法6レベル(中級中期)でこれから学習する項目(テキスト8課分)を出題している為、「仮定表現」の内容も含む。特にレベルアップを希望する学生に対する判定の目安となるものでもある。全30題は全て選択問題であり、このうちの4題が「仮定表現」に関する問題である。

「小テスト」は、各週(各課)の学習内容を復習し定着を図るもので、学習した翌週の授業で毎回実施している。全10題のうち、選択問題と文作り問題が半数ずつで構成されている。

「期末テスト」も「小テスト」と同様、選択問題と文作り問題からなる。2017年度春学期に実施した期末テストでは、全55題のうち「仮定表現」に関する問題を7題(選択問題5題、文作り問題2題)出題した。これらのテスト結果を概観すると、その誤答の大半が「場面不理解の誤用」であることが確認できた。ここでは実際の解答例を挙げながら、誤用のタイプを分類して以下に示す。<sup>4</sup>

##### 4.1 誤用のタイプ・傾向

###### (1) 因果関係の不理解

[小テスト・問題5(文作り)]

毎日ハンバーガーばかり( )、体を壊すよ。

→\*「食べれば」\*「食べるなら」(正答は「食べたら／食べると」)

前件の「毎日ハンバーガーばかり食べる」と後件の「体を壊す」の因果関係が理解されていないために起こる誤答例である。この問題では、前件で述べている内容「毎日ハンバーガーばかり食べる」が原因となって、後件で述べている内容「体を壊す」が予想される当然の結果として表されている。前件と後件が強い因果関係を表しており、「と」を使うべき表現である。後件の内容が「聞き手が望んでいない事態(悪い結果)」であることから、話し手が聞き手に対して忠告の意味での助言を行う発話意図が含まれる例である。

学習者の解答には、「食べるなら」という誤答も見られるが、これは後件の「体を壊すよ」

を「壊さないでくださいね」という「勧め」の意味として捉えてしまったものと推測される。この表現は仮定表現を使うことによって、話し手と聞き手が前件と後件の因果関係を共有するようになり、さらに聞き手に対して忠告する場面であることが明確になるだろう。

## (2) 「反事実」と「事実」の混同

[小テスト・問題2 (選択問題)]

もしあの時、彼女にプロポーズ( )、彼女と結婚できたかもしれないのに…。

→ 「していると」「すると」「するなら」(正答は「していれば」)

[小テスト・問題4 (選択問題)]

時間に遅れて待ち合わせ場所に( )、もう誰もいなかった。

→ 「行けば」「行くなら」「行ったなら」(正答は「行ったら」)

上記の問題2と問題4の誤答からは「事実的条件」と「反事実的条件」の混同が窺える。問題2は、「実際には起こらなかったこと(反事実)」を仮定し、話し手の後悔を「タ形+のに」で表しているが、事実を表す「と」を選択する誤答(「すると」「していると)」が目立つ。また、問題4は、「待ち合わせ場所に誰もいなかった」という「過去の事実」を説明するために「たら／と」を用いるべきところであるが、「ば」や「なら」を選んでいる。

「たら」「と」は前件と後件の事実関係や反事実関係を表す用法があるが、学習者は仮定表現の「条件」を表すものと理解していることが多く、事実関係や反事実の意味の理解はあまり進んでいない。例えば、「外に出たら雨が降っていた」のように発見や知覚の用法を表す「～た」と一緒に使われ事実を表す用法や、「傘を持ってくればよかったのに」のように後悔の意味を表す「～のに」と一緒に使われ反事実を表す用法を理解させる必要がある。

### (3) 「話し手の意志・希望」の見落とし

〔期末テスト・問題 21 (選択問題)〕

夏休みに (        ), 友達と旅行しようと思っています。

→ 「なると」 (正答は「なったら」)

これは、「なれば、なるなら、なったら、なると」の中から選択する形式の問題であったが、誤答は全て「なると」に集中していた。「夏休みになる。その後、旅行する」という時間的な経過の理解が不十分であったことが誤答の原因であると思われる。

また、因果関係を表す「と」を使った場合は、後件には当然な結果として生じる事態が表されるため、話し手の希望、意志を表す表現は使えない。この問題には、後件に話し手の意志を表す「旅行しよう」が使われており、仮定表現として「と」を使うと不自然であるが、それに注意が向かなかつたことも誤答の原因の一つであると考えられる。

### (4) 会話の「前提」の不理解

〔小テスト・問題 1 (選択問題)〕

A: イタリア語を勉強したいんだけど、何かいい本知らない?

B: イタリア語を (        ), この本がわかりやすくいいと思うよ。

→ 「勉強すれば」「勉強したら」 (正答は「勉強するなら」)

〔小テスト・問題 4 (文作り)〕

A: 明日、成田空港へ家族を迎えに行くんですよ。

B: つくばから成田空港へ (        ), バスを使った方がいいですよ。

→ 「行くと」「行たら」 (正答は「行くなら」)

上記の 2 問共に会話の形式で出題されており、「なら」の「前提」の用法を確認する問題である。これらの会話は、A の発話にノダ文が含まれており、自分の状況説明をすることによって B に対して助言を求めている場面である。その A の発話を受けて B が提案や推薦という意味での助言やアドバイスを与える場面であり、「なら」を使うことによって会話の「前提」が共有されるのである。上記の一つ目の選択問題では「イタリア語」、二つ目の文作り問題では「成田空港」がこれらの会話の「前提」となるキーワードである。

この用法は「なら」の最も特徴的なものであり、他の仮定表現に言い換えることがで

きない。会話の流れが理解されていれば正答が得られたのではないと思われる。しかし、会話の流れや文脈を理解していない学習者はBの発話だけに注目してしまい、他の形式を選んだ可能性がある。

次の問題も上記と同様な原因によって誤答が選ばれた例である。

〔小テスト・問題3 (文作り)〕

A: はあ、やっと終わった。疲れたから、少し休もう。

B: そっちの仕事が( ), こっちを手伝ってください。

→ 「終わったら」「終われば」「終わるなら」「まだ終わらなかったら」

「大変だったら」「たくさん残るので」(正答は「終わった(の)なら」)

上に示した誤答のうち、最も多くを占めたのが「終わったら」であった。Aの「はあ、やっと終わった」という発話を受けて、Bが別の仕事を依頼する場面であるため、Aの仕事が終わったということが「前提」となり、ここでは「(の)なら」を用いるべきである。

もし、Bの発話がAの発話を受けて行うものでない場合は、「そっちの仕事が終わったら、こっちを手伝ってください」のように「たら」を使うことも可能である。しかしその場合、「前提」の意味は含まれず、Aがやっていた仕事が「終わったあと」という時間的な経過を表すことになるため、上記の問題の文脈とは異なったものになる。

加えて、時制の間違ひも散見された。Aが「やっと終わった」とタ形で発言をしており、既に仕事が終わっていることは明らかなので、Bも「終わる(の)なら」ではなく「終わった(の)なら」と応じなければ不自然である。しかし、仮定表現の「なら」を選択した学習者であっても「終わるなら」という誤答が確認できる。

## (5) 「仮定表現」の混同以外に起因する誤答

### ①助詞の混同(「で」と「に」)

〔小テスト・問題1 (文作り)〕

授業登録の書類は、どこに( )いいでしょうか。

→ (正答は「出したら/提出したら/出せば/提出すれば」など)

「後件」が成立する条件や状況を尋ねる「疑問詞+～ば/たら」の形を作る問題である。ここでは他の仮定表現(「と」「なら」)と混同する誤答は全く見られず、助詞(特に「で」と「に」)の混同が引き起こしていると推測される誤答が大半であった。つまり、この問

いで求められている「仮定表現」（疑問詞に「～ば／たら」が接続して、条件や状況を尋ねる）については理解しているものの、後件の動詞が正しく選択できなかった誤答例が見られた。

・どこに（\*探せたら／\*探せば／\*もらえば）いいでしょうか。

というように、助詞の混同によって正しい答えが導き出せなかったと考えられる例である。

## ②「テ形」との混同

レベルチェックテストの段階（初回授業）では、多くの学生が仮定表現を学習していない状況であるため、次のような「テ形」を選択する解答が目立った。前件と後件の関係を「因果関係」あるいは「継起」と捉えたものと考えられる。

〔レベルチェックテスト・問題1（選択問題）〕

毎年冬に（ ）、インフルエンザが流行する。

→「なって」（正答は「なると」）

〔レベルチェックテスト・問題2（選択問題）〕

あのときみんなに（ ）、誤解されずにすんだのに。

→「話して」（正答は「話せば」）

〔レベルチェックテスト・問題3（選択問題）〕

この授業が（ ）、図書館でレポートの資料を探すつもりだ。

→「終わって」（正答「終わったら」）

「仮定表現」学習後の小テストや期末テストになると、テ形の誤答は少なくなるが、依然として「テ形」を用いる次のような誤答が見られた。

〔小テスト・問題2（文作り）〕

窓を（ ）、外から部屋に大きな虫が入ってきた。

→「開いてから」（正答は「開けたら／閉めなかったら／開けると／開けておくと」など）

〔期末テスト・問題 23 (選択問題)〕

9時に教室に( ),もう授業が始まっていた。

→「入って」(正答は「入ったら」)

小テスト・問題2では、(自動詞、他動詞の誤りもあるが)「開いてから」というように「テ形+から」を用いる誤答が見られ、動作主は全く考慮に入れず前件と後件を「連続した動作」と捉えていることが明らかである。また、期末テスト・問題23では、「入れば、入るなら、入って、入ったら」(假定表現3種、テ形)という選択肢からテ形「入って」を選択しており、関連する場面や状況は全て「連続した動作」と認識していること、「假定表現を用いた事実や状況の説明」が定着していないことが見てとれる。

#### 4.2 「分かった」から「使える」を目指すために

中上級レベルの文法クラスでは、文法の知識だけではなく、日常場面に即した実用的な表現能力の向上を目指した指導やテストの作成を行っている。しかし各種テストの結果から、問題文の表現する場面や状況を理解することができていないために生じた誤答が数多く確認された。假定表現の知識としての積み上げがあっても、実際の場面で適切に運用することができていなければ、それは「使える」文法ではなく、「分かったつもり」の文法で終わってしまう。

野田ほか(2001)は、文法項目の習得には、「形が作れるようになること」と「それが使えるようになること」という2つの側面があり、「使える」というのは似ている形の「対立」を習得することであると指摘している。例えば「たら」と「と」は、共に「ある条件に対して起こりそうな当然の結果」や「過去の事実」表す等、言い換えられる場面の多く、言わば「似ている假定表現」であるが、後件に「話し手の希望、意志」の表現がくると「と」は使えなくなり、「と」と「たら」の使い分けの必要性が生じる。実際に学習者の解答を見ても、特にこのような共通点が多い假定表現の使い分けに苦戦していることが窺える。

そこで、同一の学習者の解答の比較を基に、学習者にとっての「似ている形とは何なのか」、「分かっているようで、実は使えていないのはどこなのか」ということについて考えてみたい。(以下に示されている「○」「×」はそれぞれ、その学習者の正答、誤答を表す)

(1) 「たら（事実・状況説明）」と「テ形（動作の連続）」

◆学習者 A（非漢字圏）

①小テスト・問題 4（選択問題）→○

時間に遅れて待ち合わせ場所に（ ）、もう誰もいなかった。

→正答は「行ったら」

※「行ったら」「行けば」「行ったら」「行くなら」から選択する。

②小テスト・問題 2（文作り）→×

窓を（ ）、外から部屋に大きな虫が入ってきた。

→「開いてから」

（正答は「開けたら／閉めなかったら／開けると／開けておくと」等）

③期末テスト・問題 23（選択問題）→×

9時に教室に（ ）、もう授業が始まっていた。

→「入って」（正答は「入ったら」）

※「入れば」「入るなら」「入って」「入ったら」から選択する。

①～③はいずれも、「過去の事実」や「現実の状況や存在」を説明する場面であり、「たら」もしくは「と」を用いるべきところである。

①では「たら」を選択できているので、一見、学習項目を正しく理解できているかのように見えるが、②の文作りでは「開いてから」（テ形+から）と解答し、「事実の説明」を「動作の連続」と捉えてしまっていることが分かる。さらに③は①と同じく選択問題であり、文型もほぼ同じであるにも関わらず、「テ形」を選択してしまっている。

このように学習者 A の②、③の解答からは、既習の「テ形」の影響が顕著であり、「動作の連続を表す「テ形」と「事実や状況説明の「たら」の使い分けができていないことが見てとれる。①で「たら」が選択できていても、それは選択肢の中に「テ形」がないからであり、これでは「たら」を習得できたとは言えず、運用にはつながっていない。

## (2) 「たら (事実を述べる)」と「なら (事実だと仮定する)」

### ◆学習者B (漢字圏)

④小テスト・問題2 (文作り) →○

窓を ( ), 外から部屋に大きな虫が入ってきた。

→「開けると」

⑤小テスト・問題4 (選択問題) →×

時間に遅れて待ち合わせ場所に ( ), もう誰もいなかった。

→「行くなら」(正答は「行ったら」)

※「行ったら」「行けば」「行ったら」「行くなら」から選択する。

④と⑤はいずれも事実を述べる表現である。④の文作りで正しく解答できているので、事実説明の「と/たら」を習得しているかのように見えるが、⑤の解答から、実は「たら」が使えていないということばかりか、「なら」との使い分けもできていないことが確認できる。

また、以下の⑥、⑦は前節で述べた通り「なら」を用いるべき「前提」の表現であるが、学習者Bはいずれも「たら」を選択し、「たら」と「なら」の混同がさらに浮き彫りとなった。

⑥小テスト・問題1 (選択問題) →×

A: イタリア語を勉強したいんだけど、何かいい本知らない?

B: イタリア語を ( ), この本がわかりやすくいいと思うよ。

→「勉強したら」(正答は「勉強するなら」)

※「勉強するなら」「勉強したら」「勉強すると」「勉強すれば」から選択する。

⑦小テスト・問題4 (文作り) →×

A: 明日、成田空港へ家族を迎えに行くんですよ。

B: つくばから成田空港へ ( ), バスを使った方がいいですよ。

→「行たら」(正答は「行くなら」)

## 5. おわりに

本研究では仮定表現の学習者の誤答を分類し、正答との比較を通じて、学習者の「分かっているつもり」がどこに潜んでいるのか、学習者にとっての混同しやすいポイント(似

ている形)は何なのかということを中心に考察した。学習者は文法を学習しても実際には使えないという文法力と運用力の乖離を感じているが、それは本研究で行った分析結果からも如実に表れた。

文法項目を学び、使えるようになるためには、知識の学習だけではなく、実際に使われる場面や文脈、発話の意図を想定し、意味を理解しなければならない。特に、本研究で取り上げた仮定表現は前件と後件の依存関係が強く、文脈の依存度も高い。しかし、授業中に学習者が作った例文には文脈や発話意図、対人関係を考慮していないものが多く見られる。本文法クラスで実施したテストの結果には大きなギャップがあったり、思いもよらない誤答が見られたりすることがあり、驚かされることもある。

また、「頭の中では分かっているのに、それを表現するのが難しい」という学習者側からの悩みも多く耳にする。しかし、学習者自身が感じる文法力と運用力のギャップは「使える文法」の学習への第一歩であると筆者らは考えている。

中級レベルの学習者が難しいと挙げている他の文法項目についても引き続き調査を続け、「使える文法」の習得に繋がる授業運営、教材づくりを目指していきたい。

## 注

1. 対人関係を意識した文法項目の使い方、コミュニケーション能力の向上を目指した中上級レベルの文法クラスの実践については許・林・八嶋(2017)を参照されたい。
2. 中級中期レベルで取り上げられている項目は「テ形と否定形、並列、名詞修飾、時の表現、仮定表現、複合動詞、自動詞と他動詞、状態と結果」の8項目である。
3. 益岡(1993)では「条件表現」と述べているが、本研究では用語を統一し、「仮定表現」とする。
4. 解答例の分析に当たって学習者が特定できる例は削除し、個人情報が含まれないものに限定して分析を行った。

## 参考文献

- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節』くろしお出版
- 迫田久美子(2008)「学習者はなぜ間違えるのかー学習者の誤用から教え方を学ぶー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要(5)』:1-15
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法 セルフマスターシリーズ7条件表現』くろしお出版
- 許明子・宮崎恵子(2013)『レベルアップ日本語文法 中級』くろしお出版

許明子・宮崎恵子・青木幸子 (2013) 「学習者のための中級日本語教育文法の在り方—中級文法クラスのアンケート調査とアチーブメントテスト結果の比較を通して—」『筑波大学日本語教育論集』第28号、pp.85-104

許明子・林淳子・八嶋康裕 (2017) 「場面理解に基づいた表現能力の向上を目指す文法教育—中上級レベルの日本語学習者の文作り及びインタビューの分析を通して—」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第32号、21-34

前田直子 (1995) 「バ、ト、ナラ、タラ —仮定表現を表す形式—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版、pp.483-495

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

益岡隆志 (1993) 『日本語の条件表現』くろしお出版